筑波大学　地域研究 26：27-44，2006　　Area Studies Tsukuba 26：27-44，2006

異文化の友人・自他文化評価・自他の行動に関する信念が意識的配慮に与える影響

―アジア系留学生及び日本人学生の場合―

一二三　朋　子

In order to deepen crosscultural communication, special communication rules are needed. The purpose of the present study was to examine the factor influencing communication rules. The following factors were examined: crosscultural friends or crosscultural experiences, evaluation and recognition of self-culture and crossculture, beliefs about behavior of self and others, communication rules. 146 Asian foreign students and 150 Japanese students were asked to rate these factors. Factor analysis and covariance structure analysis indicated that in case of Asian foreign students, enriched foreign student life and positive evaluation of Japanese culture influenced the responsibility as the foreign student and communication rules. In case of Japanese students, foreign students friends opened the global eyes and enhanced the will to support foreign students. And then these awareness facilitated the communication rules. These results suggested the importance of crosscultural friends and crosscultural experiences for both Asian foreign students and Japanese students.

問　題

近年の日本に在住する外国人の増加に伴い，日本人と外国人とが接触する機会も増え，双方の共生及び異文化間コミュニケーションの必要性が増してきている。日本人と外国人の共生や異文化間コミュニケーションを促進するものとして，従来は，コミュニケーションの表層的能力（言語的・非言語的能力）ばかりに注意が払われてきた。しかし，異文化間コミュニケーションを深化させ，真の人間関係を形成するためには，コミュニケーション活動の主体となる人間の深層構造を無視できない（倉地，1991）。心の奥にあるものを相手に伝えたい，相手の気持ちを理解したい，感情や思想・信条などを相手に伝えよう，十分に理解し，理解されるために言葉を尽くして表現しよう，といった心的過程が重要である。

一二三（1995，2000，2003，2004）もまた，異文化間コミュニケーションにおける意識的配慮の重要性を示唆している。意識的配慮とは，異言語話者同士の出会う接触場面で，ある言語を媒介語としてコミュニケーションを遂行するために施される意識面での調整のことである。意識的配慮は相手と個として向き合い，より深いレベルでの理解を促進しようとする配慮である。異文化間コ

ミュニケーションにおいては単なる言語的コミュニケーションではなく，それを支える意識的配慮が重要といえる。

ところで，2003年現在，日本の大学に在籍する留学生は11万人を超えている。5年前に比べ留学生を雇用する企業は10倍に増え，留学生の存在は今後もさらに重要なものとなっていくことが予想される。留学生が日本での留学生活を充実させ，満足して帰国するか否かは，留学生だけでなく日本にとっても重大な問題といえよう。留学生活における満足感・充実感には，大学の提供する教育や生活環境の他に，日本人との人間関係が大きく寄与していることは，これまでにも何度も指摘されてきた（岩男・萩原，1988；馬越，1991；萩原，1991）。しかし，現実には必ずしも満足のいく人間関係が形成されているとはいえない（大橋，1991）。双方の交流を妨げるものには，言語的問題だけでなく，日本人側の問題（大橋，1991），留学生側の問題（大橋，1991），双方の問題（横田，1991；勝谷・山本・坂元，2001）が考えられる。今後，留学生と日本人との交流を促進するためには，留学生・日本人の双方に関する意識的配慮の研究が不可欠である。横田（1991）は，留学生にとっても日本人・日本社会にとっても有効な受け入れ体制を中期的・長期的に築いていくためには，なぜ留学生と日本人との交流が大切であるのかを理論付ける研究が必要だとしている。つまり，留学生との交流は本当に日本人の中に異文化を受け容れる心を育んだり，意識的配慮を促進したりすることになるのか，或いは，留学生にとって，日本での生活や日本人の友人を持つことが，どれだけ日本人や日本社会の理解に役立ち，ストレス低減を助けるのかといった研究である。今後日本社会の多国籍化がますます進むことが予測される中，留学生側のみに一方的に同化や適応を求めることは非現実的である。留学生側（参入側）と日本人側（受入側）とでは，ニーズも環境も条件も全く異なる。そうした差異を踏まえた上で，どのような要因が異文化間コミュニケーションを深めるのか，異文化間コミュニケーションのために重要である意識的配慮の活性化を促すのかを，留学生と日本人との双方について検討することが必要といえよう。

そこで本研究は，留学生の90％以上を占めるアジア系留学生及び日本人学生を対象に，意識的配慮の促進に関する機制を検討することを目的とする。異文化の友人や異文化との出会いによって，自己の内面がどのように変化し，その結果，異文化間コミュニケーションを深める意識的配慮がどのような影響を受けるのかを検証することは，日本における留学生受け入れ体制を整えていく上で大きな理論的基盤を提供すると考えられる。

調査1

目的

アジア系留学生に関して，接触場面における意識的配慮に関わる諸要因間の関連を検討し，どのような要因が意識的配慮を活性化するかを明らかにする。

因果モデル

一二三（2003，2004）は，アジア系の留学生・ボランティア日本語教室学習者を対象とした研究

で，意識的配慮が非言語重視型信念の影響を受けて活性化することを報告している。非言語重視型信念とは，外国語学習において言語以外の要素，例えばその国の文化や習慣，考え方などを学ぶことを重視する信念のことであり，接触場面での相手との関わり方に関与する信念と解釈できる。このことは，接触場面において自分がどのように日本人と関わっていくべきかという信念が意識的配慮に直接的・間接的に影響を与えることを推測させるものである。また，吉（1999）は，中国人留学生を対象に，日本への異文化適応とイラショナル・ビリーフとの関連を検討している。イラショナル・ビリーフとは物事に関する非論理的捉え方・受け取り方のことである（石隈，1989）。調査の結果，他者に関するイラショナル・ビリーフ（例えば「周りは日本語で不自由している自分にいつも親切にしてくれるべきだけ」など）は心身の健康と負の相関を示し，自己に関するイラショナル・ビリーフ（例えば「私は日本での生活に早く慣れなければならない」など）は心身の健康と正の相関を示していたことが報告されている。吉の研究は，日本における留学生活の中で自分はどのように行動すべきか，日本人はどのように行動してくれるべきかといった「自他の行動に関する信念」が心身の健康だけでなく，異文化における人との交流や意識的配慮にも影響を与えることを推測させる。例えば留学生の場合，「日本人は外国人を差別すべきではない」という信念を強く持つ者は，日本人の自分に対する行為を差別と捉えがちになり，その結果被害者意識を募らせ，日本人との交流に対して拒否的になり，意識的配慮を抑制することが想像される。一方，「留学生として日本の文化をしっかり勉強しなければならない」という信念を持つ者は，日本人との接触の場を日本文化を学ぶ好機と捉えて日本人との交流を求め，異文化間コミュニケーションを深化させるための意識的配慮を活性化させるであろう。

「自他の行動に関する信念」に対して，相手への評価・心的態度や，自分の受け容れられ方に関する認知が強く影響を与えることが考えられる。アジア系留学生・ボランティア日本語教室学習者を対象とした研究では，相手との交流意図が非言語重視型信念を強めることが報告されている（一二三，2003；2004）。早矢仕（1997）は，アジア系留学生を対象とした研究で，日本文化への積極性が日本での適応にとって重要であることを指摘している。また山﨑・平・中村・横山（1997），山﨑・倉元・中村・横山（2000）では，日本人による自エスニシティへの好意・関心の認知が対日態度に影響を与えることを指摘している。さらに勝谷他（2001）はアジア系留学生と日本人学生との交流に関する研究で，相手の行動意図をネガティブに知覚することが，接触欲求を低め接触量を減少させることを明らかにしている。これらの研究は，多少の視点の相違はあるものの，相手に対してどのような評価や態度を持つか，また，自文化・自分に対する相手の評価や行動をどう認知・知覚するかが，異文化に関わる心理的要因や行動と深く関連するという点で共通している。つまり，自他の文化に関する評価・認知が肯定的か否定的かによって，自分のすべき行動や相手に求める行動に関する信念は影響を受けることが予想される。例えば，日本文化を高く評価すれば，留学生としてさらに積極的に勉学に取り組まねばといった信念は強まるであろう。また，日本人が自文化を高く評価していると認知すれば日本人に対する親近感が強まり，「日本人は外国人にもっと親切にしてくれるべきだ」といった信念は緩和されるであろう。そこで本研究では「自他の行動に関する信念」に影響を与える要因として「自他文化に関する評価・認知」を仮定する。

また，「自他の行動に関する信念」は，日本人との関係や留学生活の充実といった「留学生活に関する満足感」の影響を受けることが推測される。これまでにもアジア系の留学生・就学生を対象とした研究で，日本人友人やエスニシティに関わる経験が対日態度や対日イメージ，意識的配慮に影響を与えることが指摘されてきた（山崎，1993，1994；山崎他1997，2000；一二三，2003，2004）。日本人友人ができるか否か，日本での生活に慣れ，生活が充実しているか否かが，自分がすべき行動や相手に求める行動に関する信念に影響を与えることは想像に難くない。例えば，日々の生活に関する充実感は精神的な安定や余裕をもたらし，日本人の行動に対する過度な期待は低減する一方，留学生として祖国のために頑張らなければといった信念は強化されるであろう。

「自他文化に関する評価・認知」や「日本での生活に関する満足感」は，日本語能力に関係することが考えられる。山崎（1994）は，滞在期間が長くなるにつれ日本語能力が上がり，それに伴って日本人友人が増えると同時に差別感は低減することを明らかにしている。日本語能力が高くなれば日本人との意思疎通が円滑に行われ，日本人友人も増えるであろうし，日本人の考え方や日本文化に対する理解も深まるであろう。同時に，日本人が自文化をどのように評価しているのかについて知るきっかけともなるであろう。日本語能力は滞在期間によって変化することが考えられる。滞在期間が長くなるほど，日本語に接する機会や時間が増え，日本語能力は高くなっていくであろう。そこで，「自他文化に関する評価・認知」「日本での生活に関する満足感」に影響を与える要因として「日本語能力」「滞在期間」を仮定する。

以上の諸要因間の関連を因果モデルに表わしたものがFig. 1である。

方法

被調査者　東京都及び茨城県の大学に在籍するアジア系留学生150名（男性66名，女性84名；10代８名，20代129名，30代７名，不明６名）を対象とした。平均滞在期間は23.5ヶ月，出身国は，中国（104名），韓国（14名），台湾（10名），ベトナム（10名），その他７カ国であった。

質問紙構成　本研究の分析に用いる質問項目は以下の通りである。

1）滞在期間（月数）　1項目

2）日本語能力　6項目

3）日本での生活に関する満足感　12項目

4）自他文化に関する評価・認知　10項目

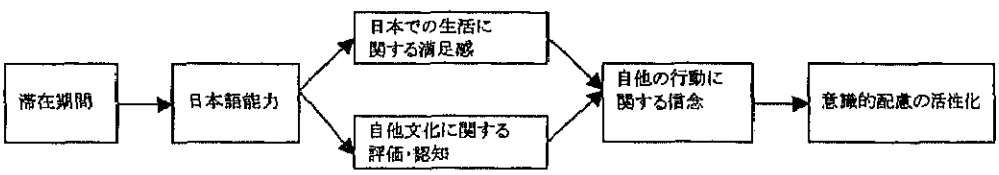


Fig. 1　意識的配慮活性化の因果モデル：留学生の場合

5）自分の行動に関する信念　10項目

6）日本人の行動に関する信念　9項目

7）意識的配慮　25項目

2）は山﨑（1994）を参考にして，日本語能力に関する4技能即ち「話す・聞く・読む・書く」について自己評定させる質問項目を作成した。3）は山﨑（1994），山﨑他（1997），早矢仕（1997）を参考にして，日本人との交友関係，日本での生活に対する慣れや充実感に関する項目を質問項目とした。4）は山﨑他（1997）を参考にして，日本文化に対する評価及び自文化に対する日本人の関心や好意の認知に関する質問項目を作成した。5），6）は吉（1999）及び，留学生65名に対する予備調査（「あなたは日本での生活で何をしなければならないと思いますか」，「日本人は外国人に対してどのようなことをしてくれるべきだと思いますか」という質問に対する自由記述）結果を参考にして質問項目を作成した。7）は外国人留学生の意識的配慮を検討した岡崎・一二三（1995）及び一二三（2000；2003；2004）を参考にした。2），3），4），5），6）は5段階，7）は7段階で評定を求めた。

質問紙は，日本語版の他，中国語，韓国語，英語，ベトナム語，ラオス語，カンボジア語を用意した。当該言語の母語話者が各言語に翻訳し，当該言語の別の母語話者または当該言語に堪能な日本語母語話者がチェックすることで正確さを期した。

調査時期・手続き　質問紙の配布・回収は，2003年12月から2004年5月まで，調査者本人が配布・回収した。

分析　まず，「日本語能力」「日本での生活に関する満足感」「自他文化に関する評価・認知」「自分の行動に関する信念」「日本人の行動に関する信念」「意識的配慮」それぞれの構成要因を因子分析によって検討する。次に，因果モデルに基づき，意識的配慮の活性化に関わる諸要因間の関連を共分散構造分析により検証する。

結果

構成要因の抽出　2）～7）の各項目群について固有値を1.0以上とした因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った。

「日本語能力」については固有値1.0以上の因子は1つしか抽出されず，第1因子の寄与率が61.04%であることから1因子構造と判断した（Table 1）。

「日本での生活に関する満足感」については3因子が抽出された。第1因子は日本での生活や日本人とのコミュニケーション・考え方などへの慣れを示す「日本文化への習熟」，第2因子は勉学に対する集中・充実感を示す「充実感」，第3因子は日本人との交友関係を示す「日本人友人」と命名した（Table 2）。

「自他文化に関する評価・認知」については2因子を抽出した。第1因子は自分の国の文化や歴史に向けられた日本人の評価や関心への認知を示す「自文化評価認知」，第2因子は日本文化に対する評価を表わす「日本文化評価」と命名した（Table 3）。

「自分の行動に関する信念」については2因子が抽出された。第1因子は自国の代表として或い

は自国の発展のために勉強しなければならないといった留学生としての使命感・責任感を示す「使命・責任感」，第2因子は，日本社会に溶け込み，もっと日本人の考え方や行動を理解しなければならないという義務感を示す「同化・順応義務」と命名した（Table 4）。

「日本人の行動に関する信念」については2因子を抽出した。第1因子は外国人に対する差別や

Table 1　因子分析結果－日本語能力－

項　　目	因子1
X1 電話で話ができる	.893
X2 ラジオやテレビのニュースを聞いて理解できる	.872
日本人の友達と楽しく会話をすることができる	.829
新聞の記事を読んで理解できる	.752
お礼の手紙など簡単な手紙が書ける	.672
買い物など日常生活に必要な簡単なことは用を足せる	.633

Table 2　因子分析結果－日本での生活に関する満足感－

項　　目	因子1	因子2	因子3
〔日本文化への習熟〕			
X3 日本人とのコミュニケーションに困らない	.686	.213	.283
X4 日本の食べ物は何でも食べられる	.679	.103	-.006
X5 日本人の考え方が理解できる	.603	.092	.242
外国人に対する日本人の態度に慣れてきた	.460	-.114	-.065
来日したばかりの頃は困ったが、最近は日本人と同じように行動できる	.458	.248	.424
〔充実感〕			
X6 学校での勉強に集中することができる	.113	.791	.067
X7 学校での勉強に大変やりがいを感じている	.090	.565	.131
今所属している学校が大変好きである	.168	.544	.050
学校での勉強をする気があまりしない	.168	.435	-.126
〔日本人友人〕			
X8 学校での勉強がわからないとき日本人の友達に積極的に質問している	.122	.125	.735
一緒にいて楽しくなる日本人の友達がいる	-.053	.026	.672
X9 学校の日本人は親切に接してくれる	.186	.183	.381

Table 3　因子分析結果－自他文化に関する評価・認知－

項　　目	因子1	因子2
〔自文化評価認知〕		
X10 日本人は私の国を尊敬している	.833	.171
X11 日本人は私の国に対して好意を持っている	.817	.116
日本人は私の国の文化や習慣をよく理解し尊重してくれる	.741	.215
日本人は私の国の将来に関心を持ち、期待している	.707	.132
日本人は私の国の歴史や文化に関心を持っている	.606	.123
〔日本文化評価〕		
X12 日本の習慣・行動様式などを積極的に取り入れたい	.118	.833
X13 日本の文化をとてもすばらしいと思う	.207	.808
X14 日本の文化や慣習をもっと勉強したい	.165	.797
日本人をとてもすばらしいと思う	.221	.690
日本の習慣・行動様式などを私の国の人にも紹介し、私の国でも普及させたい	.056	.455

偏見を捨て，対等な扱いをすべきだという要求を示す「平等要求」，第２因子は自国のニュースの放送や公共の場に自国語の表記をすべきだといった内容から「国際化要求」と命名した（Table 5）。

「意識的配慮」については３因子が抽出された。３因子はそれぞれ，正確な文法や発音で発話し，相互の正確な理解を達成しようとする「正確性配慮」，相手の考えていることに合わせて自分の意見を変えたり多少の不明点は追求しない「同調配慮」，自分の感情や意見を単刀直入に表現する「率直性配慮」と解釈した。これらは一二三（2003，2004）でも報告されている意識的配慮とほぼ共通しているものである（Table 6）。

モデルの検討　モデルの妥当性を共分散構造分析により検討する。各構成概念の観測変数は，因子分析において因子負荷量及び影響指標の高いものを採用した。詳細は次のとおりである。「日本語能力」に関しては２項目を用いた。「日本での生活に関する満足感」に関しては，「日本文化への習熟」に３項目，「充実感」「日本人友人」には各２項目を使用した。「自他文化に関する評価・認知」に関しては，「自文化評価認知」に２項目，「日本文化評価」に３項目を用いた。「自分の行動に関する信念」については，「使命・責任感」「同化・順応義務」に各２項目を用いた。「日本人の

Table 4　因子分析結果－自分の行動に関する信念－

項　　目	因子1	因子2
〔使命・責任感〕		
X15 留学生は，将来自分の国の発展に貢献するようにもっと勉強しなければならない	.873	.108
留学生は，自分の国の代表としていつも立派に行動しなければならない	.640	.080
X16 留学生は，将来日本と自分の国との架け橋にならなければならない	.635	.271
留学生は，日本人に信用されるように努力しなければならない	.530	.428
留学生は，日本にいる間に技術や資格を身につけなければならない	.418	.307
〔同化・順応義務〕		
X17 留学生は，積極的に日本人の友達を作らなければならない	.059	.688
留学生は，日本人の考え方や感情を理解しなければならない	.072	.509
留学生は，日本文化についてもっと勉強しなければならない	.208	.435
X18 留学生は，日本人と同じように行動しなければならない	.212	.322
留学生は，日本語が上手になるようにもっと勉強しなければならない	.120	.294

Table 5　因子分析結果－日本人の行動に関する信念－

項　　目	因子1	因子2
〔平等要求〕		
X19 日本人は，外国人に対する偏見を捨てるべきだ	.832	.218
X20 外国人は，日本で生活していく上で国籍によって差別されるべきではない	.747	.121
日本人は，仕事などの際，外国人にも日本人と同じチャンスを与えるべきだ	.583	.275
日本人は，日本にいる外国人にもっと親切にするべきだ	.491	.347
日本人は，もっと日本文化について知るべきだ	.478	.449
〔国際化要求〕		
X21 日本人は，もっと私の国のニュースを放送するべきだ	.157	.780
X22 公共の場にもっと私の国の言語による表記があるべきだ	.145	.686
日本人は，もっと積極的に私の国の文化や歴史を勉強するべきだ	.352	.640
日本人ははっきりと自分の意見を表現すべきだ	.257	.360

行動に関する信念」については，「平等要求」「国際化要求」にそれぞれ２項目用いた。「意識的配慮」については，「正確性配慮」に３項目，「同調配慮」に３項目，「率直性配慮」に２項目を用いた。

各構成概念間の相関行列を Table 7に示す。構成概念間で有意な相関を示しているものについて

Table 6　因子分析結果－意識的配慮－

項　　目	因子1	因子2	因子3
〔正確性配慮〕			
X23 正しく発音する	.736	.056	.038
X24 文法的に正しく話す	.601	.107	-.072
X25 相手の話の内容を正確に理解しようと努める	.578	-.048	.101
相手が自分の話を正確に理解しているかに注意する	.576	.087	.193
相手の気持ちを考え失礼にならないようにする	.529	.156	-.020
相手の話を最後まで聞く	.525	.118	.077
話が途切れないように気を付ける	.502	.066	.058
自分と相手との文化慣習の違いに注意する	.502	.179	.178
議論は避ける	.495	.162	.021
相手の反応から、相手の感情や意見を推測する	.475	.315	.091
相手にも話す機会を与える	.473	-.071	.273
相づちを打つ	.425	.240	.062
わからないときは繰り返してもらい確認する	.405	.079	.276
積極的に発言する	.317	.124	.189
〔同調配慮〕			
X26 相手の反応に合わせて自分の意見を変える	.172	.657	.006
X27 わからなくてもわかったふりをする	-.060	.586	-.018
X28 相手が自分をどう思っているかに注意する	.161	.498	.198
言葉遣いは適当かどうかに気をつける	.281	.392	.102
日常的なことを話す	.077	.381	.219
中立的な立場で意見を言う	.202	.294	.056
〔率直性配慮〕			
X29 いやならいやとはっきり言う	-.060	.176	.755
X30 感情をはっきり出す	.200	-.112	.630
相手と意見が違うときは納得いくまで話す	-.036	.368	.476
自分の意見はストレートに言う	.242	.132	.459
冗談を言って相手を楽しませる	.103	.300	.374

Table 7　構成概念間の相関行列（留学生；n=150）

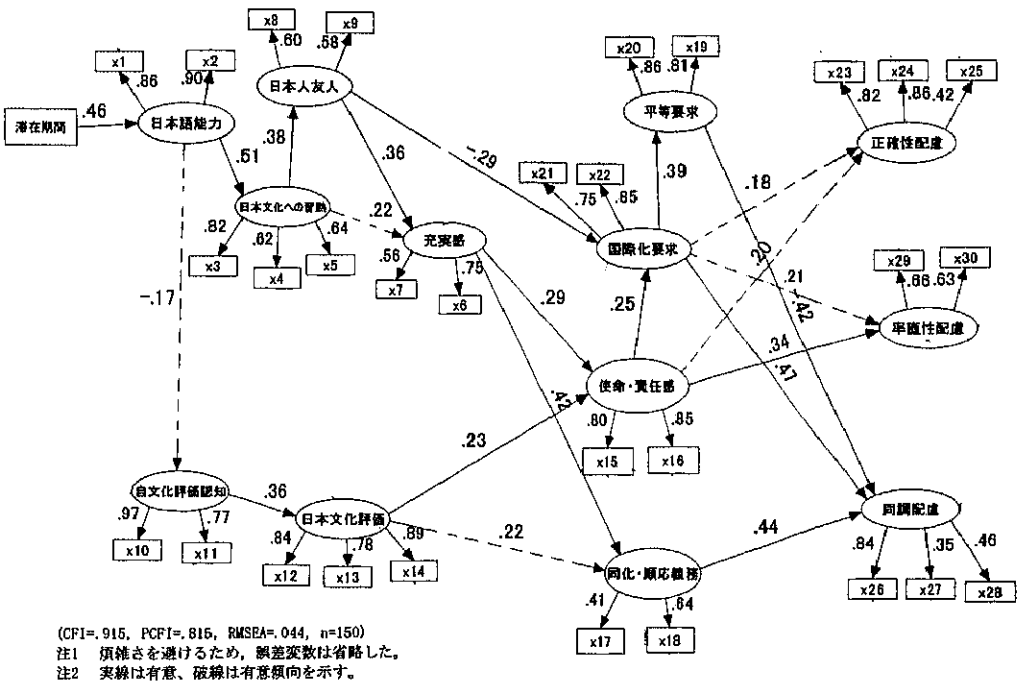
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 日本語能力	1												
2 日本人文化への習熟	.42	1											
3 充実感	.02	.24	1										
4 日本人友人	.04	.25	.21	1									
5 自文化評価認知	-.15	.04	.13	.15	1								
6 日本文化評価	-.03	.01	.09	.11	.32	1							
7 使命・責任感	.01	-.04	.22	.09	-.06	.20	1						
8 同化・順応義務	.01	.18	.18	.14	.16	.20	.27	1					
9 平等要求	.04	.11	.08	-.04	-.13	-.07	.08	-.02	1				
10 国際化要求	.07	-.05	-.12	-.20	-.06	-.07	.19	-.00	.33	1			
11 正確性配慮	.11	.07	.16	-.00	.04	.06	.21	.09	.16	.16	1		
12 同調配慮	.01	-.09	-.05	.08	-.11	-.00	.13	.22	-.14	.18	.12	1	
13 率直性配慮	.01	.11	.09	.12	.08	.12	.25	.16	.15	.20	.07	.13	1

は互いに影響を与え合っていることが考えられるので，相互にパスを加えてパスダイアグラムを構成した。このモデルを元にAMOS5を用いた共分散構造分析を行い，不要なパスを削除したり新たにパスを加えたりしながらモデルの適合度を調べ，最終的に得られたモデルをFig. 2に示す。Fig. 2中のパス係数は標準化されたものである。適合度指標はCFI（Comparative fit index）＝.915，PCFI（CFI × Parsimoniy ratio）＝.815，RMSEA（root mean square error of approximation）＝.044であった。構成概念から観測変数に対する影響指標は1つを除いて全て．40以上であり，構成概念と観測変数は適切に対応しているといえる。

考察

Fig. 2より，「滞在期間」から「日本語能力（パス係数.46)」への影響が見られることから，日本での滞在期間に伴い日本語能力が向上することがわかる。そして「日本語能力」から「日本文化への習熟（.51)」，さらに「日本文化への習熟」から「日本人友人（.38)」への影響が見られる。日本語能力が向上すると日本人の行動や考え方などへの理解が増し，日本人友人が増えることが推測される。この点は山崎（1994）と一致する結果である。また「充実感」に対しては「日本人友人（.36)」と「日本文化への習熟（.22)」からの影響が見られる。日本人との人間関係が豊かになり，日本での慣習にも慣れていくことで，勉強への集中力や勉学意欲が高くなることがうかがえる。

一方，「日本語能力」は「自文化評価認知（－.17)」に負の影響を与えている。日本のメディアが欧米（白人）偏重の傾向があることはつとに指摘されてきたことであるが，本研究で対象とした



(CFI=.915, PCFI=.815, RMSEA=.044, n=150)
注1　煩雑さを避けるため，誤差変数は省略した。
注2　実線は有意、破線は有意傾向を示す。

Fig. 2　意識的配慮活性化のパスダイアグラム：留学生の場合

アジア系留学生もまた，日本語能力が高くなるにつれ，自文化が日本人に尊重されていないこと，日本人の関心が薄いことを鋭敏に感知するのであろう。岩男・萩原（1988）では来日後1年の間に対日イメージを悪化させることが報告されている。本研究での被調査者の平均滞在期間は2年弱であることから，日本人の自文化に対する無関心さに気づき始めることと対日イメージ悪化とには何らかの関係のあることが推測される。この「自文化評価認知」は「日本文化評価（.36)」に影響を与えている。日本人が自文化を重視していないことを認知することで日本文化への評価や関心も減退するが，逆に，日本人の自文化に対する評価が高いと認知すれば，日本文化への評価・関心も高くなることがわかる。

留学生活の「充実感」は，自分の行動に関する2つの信念「使命・責任感（.23)」「同化・順応義務（.22)」の両方に影響を与えている。同様に，「日本文化評価」も「使命・責任感（.23)」「同化・順応義務（.22)」に影響を与えている。日本での留学生活が充実することや日本文化がすばらしいと感じることが，自国の繁栄のためにさらに勉学に努めなければならないといった使命感を強めると同時に，日本人の感情などを日本人と同じように理解しよう，できるだけ日本人と同じように行動しようといった同化・順応への意志を強めるのである。

さらに，「使命・責任感」は「率直性配慮（.34)」と「正確性配慮（.20)」に，「同化・順応義務」は「同調配慮（.44)」に影響を与えている。自国の繁栄や日本と自国との架け橋のためといった使命感は，より正確に理解し合おう，率直に意見を表明しようといった日本人との会話への積極的な関与を促す配慮を活性化する一方で，日本人や日本社会に溶け込まなければといった信念は，日本人に同調しながら穏便に会話を進める配慮を活性化することが示されている。留学生活の中で自分がどう行動すべきかという信念の質や強さにより，日本人とのコミュニケーションへの関与の仕方が変化することがわかる。そして，これらの信念は，留学生活における「充実感」や「日本文化評価」「自文化評価認知」からの影響を受けている。このことは，異文化間コミュニケーションの深化にとって，留学生活の充実及び日本文化への評価や日本人の態度がいかに重要であるかを示唆するものである。

また，「国際化要求」から「正確性配慮（.18)」「率直性配慮（.21)」「同調配慮（.47)」への影響が見られる。このことは，日本社会や日本人に期待や要求を一方的に押し付けるのではなく，留学生自身も積極的に接触場面で働きかける努力をすることを示唆するという点で注目すべきであろう。換言すれば，日本は外国のニュースや文化にもっと目を向け開放的になるべきだという要求は，ひるがえって自分たちもまた日本人に対し心を開き，積極的に関わっていこうという意識を高めさせ，その結果，異文化間コミュニケーションのための意識的配慮を活性化すると解釈できる。この「国際化要求」は「使命・責任感（.25)」及び「日本人友人（−.29)」からの影響を受けている。留学生としての使命感は日本人・日本社会への要求や期待を大きくさせるが，日本人の友人を持つことは日本人に対する要求・期待を低減させている。日本人の友人をもつことで日本人に対し寛容になることが推測される。また，この「国際化要求」から「平等要求（.39)」，「平等要求」から「同調配慮（−.42)」へと影響を与えている。日本の国際化への期待は，それが満たされないときに日本人に対する不満へと変わり，日本人や日本社会が自分たちに閉鎖的・差別的であるといっ

た被害者意識を喚起するようになり，その結果，相手に協調しつつ穏便に会話を進めようという意識的配慮が抑制される可能性を示唆するものである。

調査 2

目的

日本人学生に関して，接触場面における意識的配慮に関わる諸要因間の関連を検討し，どのような要因が意識的配慮を活性化するかを明らかにする。

因果モデル

日本人学生の意識的配慮について，基本的には留学生とほぼ同様の諸要因間の関連を仮定する。意識的配慮には留学生との円滑な交流のために行うべき「自他の行動に関する信念」が影響を与えるであろう。「日本人学生は留学生の文化をもっと理解してあげるべきだ」という信念の持ち主は，相手に対する理解を深めよう，率直に自分の意見を伝えようとする意識的配慮を活性化するであろう。次に，「自他の行動に関する信念」に対しては，「自他文化に関する評価・認知」が影響を与えることが推測される。相手に対してどのような評価や認知をするかが，留学生との交流に関わろうとする際の自分の行動や，留学生に求める行動のあり方を規定していくと考えられる。留学生の文化に好意的な態度を有する者は，留学生に対するサポートなど積極的役割を果たすべきだという信念を強く持つであろう。こうした「自他文化に関する評価・認知」には，留学生との交流が強く影響することが推測される。日本の大学において日本人側は多数派であり，留学生との交流は自ら能動的に求めない限り，日常的に行われるものとはいえない。言い換えれば，留学生の存在は，無視しようと思えば容易に無視しうるのである。そうした現状において留学生との交流を持つことは，日本人学生の「自他文化に関する評価・認知」に少なからぬ影響を与えることが推測される。そこで「自他文化に関する評価・認知」に影響を与える要因として「留学生との交流」を仮定する。以上の諸要因間の関連を因果モデルに表現し Fig. 3に示す。

方法

被調査者　茨城県の大学に在籍する日本人学生146名（男性39名，女性107名；10代82名，20代63名，30代１名）を対象とした。

質問紙構成　本研究の分析に用いる質問項目は以下の通りである。

１）留学生との交流　７項目

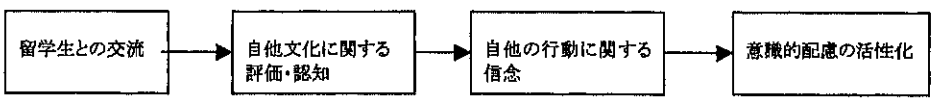


Fig. 3　意識的配慮活性化の因果モデル：日本人学生の場合

2）自他文化に関する評価・認知　7項目
3）自分の行動に関する信念　10項目
4）留学生の行動に関する信念　10項目
5）意識的配慮　25項目

1）は山崎（1994），山崎他（1997），早矢仕（1997）を参考にして，留学生との友人関係や留学生との交流に対する感じ方を問う項目を質問項目とした。2）の「自他文化に関する評価・認知」については，留学生の国の文化に対する興味・関心を問う項目と，日本文化に対する留学生の関心や好意の認知に関する項目を質問項目とした。日本人学生の場合は留学生と異なり，留学生と接することが即座に留学生の国の文化に対する評価に結びつくのではなく，まず留学生の国の文化への関心が高まると考えたからである。3），4）は日本人学生12名に対する予備調査（「留学生と日本人学生との交流を促進するために，日本人学生はどのようなことをすべきだと思いますか。また，留学生はどのようなことをすべきだと思いますか」という質問に対する自由記述）結果を参考にして質問項目を作成した。5）は，日本人の意識的配慮を検討した一二三（1995，1999）を参考にして，留学生に使用した質問項目と同じ質問項目を日本人学生に適用しても支障はないと判断し，同様の項目を質問項目とした。1），2），3），4）は5段階，5）は7段階で評定を求めた。

尚，以上の質問項目のうち留学生に関する質問に関しては，被調査者がどこの地域の留学生を想定するかが回答に影響を与える恐れがある。そこで，質問紙の末尾に「留学生の出身地」に関して以下の質問を付した。「回答するに当たり，どこの出身地の留学生をイメージしたか（特にイメージしなかった／東アジア系／欧米系／アフリカ系／その他）」「（特定の地域をイメージしたと答えた者に対して）他の地域の留学生をイメージした場合，回答は違ってくると思うか（他の地域であっても答は変わらない／他の地域であれば答は変わる）」という2問である。

調査時期・手続き　質問紙の配布・回収は，2004年12月から2005年1月まで，調査者本人が配布・回収した。回収したもののうち，上記の「留学生の出身地」の問いに対して「特にイメージしなかった」或いは「ある地域をイメージしたが，他の地域であっても答は変わらない」と答えた被調査者のみを分析の対象とした。分析の対象となったのは137名である。

分析　まず，因果モデルにおける「留学生との交流」「自他文化に関する評価・認知」「自分の行動に関する信念」「留学生の行動に関する信念」「意識的配慮」それぞれの構成要因を因子分析によって検討する。次に，意識的配慮の活性化に関わる諸要因間の関連を共分散構造分析により検証する。

結果

構成要因の抽出　1）～5）の各項目群について固有値を1.0以上とした因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った。

「留学生との交流」については2因子が抽出された。第1因子は親しい留学生友人の存在を示す「留学生友人」，第2因子は留学生への理解や親しみを表わす「留学生親近感」と命名した（Table 8）。

「自他文化に関する評価・認知」については2因子を抽出した。第1因子は日本人及び日本の文化や歴史に対する留学生の評価や関心への認知を示す「日本文化評価認知」，第2因子は留学生の国の文化や言語への興味・関心を示す「留学生の文化への興味」と命名した（Table 9）。

「自分の行動に関する信念」については2因子が抽出された。第1因子は留学生に対して積極的に援助したり声をかけたりすべきだという義務感を示す「サポート義務」，第2因子は日本人の価値観や生活習慣を強要せず，留学生の価値観や文化の違いなどを理解し受け容れるべきだという義

Table 8　因子分析結果－留学生との交流－

項　　目	因子1	因子2
〔留学生友人〕		
X1　一緒にいて楽しくなる留学生の友達がいる	.833	.400
X2　外国についてわからないこと／知りたいことがあるとき、留学生の友達に積極的に質問している	.787	.345
留学生と初めて接したときは戸惑ったが、最近は留学生の行動がよく理解できる	.641	.516
留学生は親しみをもって接してくれる	.589	.496
〔留学生親近感〕		
X3　留学生の態度や行動に慣れてきた	.463	.815
X4　留学生とのコミュニケーションに困らない	.312	.745
X5　留学生の考え方がよく理解できる	.541	.622

Table 9　因子分析結果－自他文化に関する評価・認知－

項　　目	因子1	因子2
〔日本文化評価認知〕		
X6　留学生は日本の文化や習慣をよく理解し尊重してくれる	.768	.183
留学生は日本人に対して好意を持っている	.725	.089
X7　留学生は日本の歴史や文化に関心を持っている	.610	.206
留学生は日本の将来に関心を持ち、期待している	.544	-.060
〔留学生の文化への興味〕		
X8　留学生の国の文化や慣習についてもっと知りたい	.142	.857
X9　留学生の国の言語を勉強してみたい	.026	.728
留学生に、留学生の国の料理の作り方を教えてもらいたい	.113	.608

Table 10　因子分析結果－自分の行動に関する信念－

項　　目	因子1	因子2
〔サポート義務〕		
X10　日本人学生は留学生にもっと積極的に話しかけるべきだ	.733	-.110
X11　日本人学生は留学生が困っていそうなときには積極的に手助けするべきだ	.674	.171
X12　日本人学生は留学生をもっと食事や旅行などに誘ってあげるべきだ	.671	.118
日本人学生は留学生の日本語のサポートをしてあげるべきだ	.620	.074
日本人学生は留学生との文化の違いなどを理解すべきだ	.475	.345
日本人学生は留学生を国籍によって差別すべきではない	.471	.070
〔受容義務〕		
X13　日本人学生は留学生の価値観を否定しないように気をつけるべきだ	.191	.722
日本人学生は留学生との価値観や生活習慣の違いを知るべきだ	.335	.476
X14　日本人学生は留学生に日本人の生活習慣などを押し付けるべきではない	.049	.350
日本人学生は留学生が日本の習慣に反しているときははっきり注意すべきだ	.033	.164

務感を示す「受容義務」と命名した（Table 10）。

「留学生の行動に関する信念」については，因子負荷量の低い1項目を除外して再度因子分析を行い，2因子を抽出した。第1因子は，留学生は日本人の考え方を理解し，できるだけ日本の生活習慣や日本人の行動に合わせるべきだという要求を示す「同化要求」，第2因子は，留学生同士で壁を作らず積極的に日本人の中に溶け込むべきだという要求を表わす「積極的関与要求」と命名した（Table 11）。

「意識的配慮」については3因子が抽出された。第1因子は正確な文法や発音，適切な言葉遣いで発話しようとする「正確性配慮」，第2因子は自分の意志や感情を明瞭に表現する「率直性配慮」，第3因子は会話中の不明な点にこだわらず臨機応変に相手に合わせようとする「同調配慮」と解釈した。これらは調査1で抽出されたアジア系留学生の意識的配慮とほぼ共通しているものである（Table 12）。

モデルの検討　モデルの妥当性を共分散構造分析により検討する。各構成概念の観測変数は，因子分析において因子負荷量及び影響指標の高いものを採用した。まず「留学生との交流」について「留学生友人」に2項目，「留学生親近感」に3項目を用いた。「自他文化に関する評価・認知」に関しては「日本文化評価認知」「留学生の文化への興味」に各2項目を用いた。「自分の行動に関する信念」のうち，「サポート義務」に3項目，「受容義務」に2項目を用いた。「留学生の行動に関する信念」に関しては，「同化要求」に3項目，「積極的関与要求」に2項目を用いた。「意識的配慮」については，「正確性配慮」「同調配慮」「率直性配慮」に各3項目を用いた。

各構成概念間の相関行列をTable 13に示す。構成概念間で有意な相関のものには相互にパスを加えたパスダイアグラムを基に共分散構造分析を行い，モデルの適合度を調べながらパスの削除や追加を繰り返して，最終的に得られたモデルをFig. 4（パス係数は標準化されたもの）に示す。適合度指標はCFI＝.897，PCFI＝.802，RMSEA＝.052であった。構成概念から観測変数に対する影響指標はいずれも．45以上であり，構成概念と観測変数は適切に対応しているといえよう。

Table 11　因子分析結果－留学生の行動に関する信念－

項　　目	因子1	因子2
〔同化要求〕		
X15　留学生は日本人の考え方や習慣などを理解すべきだ	.706	.149
X16　留学生は日本人の生活習慣にできるだけ合わせるべきだ	.586	.119
X17　留学生は日本語がより上手になるようにもっと努力すべきだ	.557	.371
留学生はわからないことははっきり日本人に聞くべきだ	.514	.384
留学生は自国の文化や生活習慣について積極的に日本人に紹介すべきだ	.456	.383
留学生は文化の違いなどについて日本人が理解し易いように努力すべきだ	.402	.300
〔積極的関与要求〕		
X18　留学生は助けてもらうだけでなく，積極的に日本人に協力すべきだ	.160	.647
X19　留学生は留学生間でもできるだけ日本語を使うべきだ	.159	.568
留学生は留学生だけのグループで固まるべきではない	.178	.325

考察

Fig. 4より，「サポート義務」が「正確性配慮（.29)」と「率直性配慮（.24)」に影響を与えている。これは，日本人学生は留学生をもっと援助してあげるべきだ，より積極的に声をかけて仲間に

Table 12　因子分析結果－意識的配慮－

項　　目	因子1	因子2	因子3
〔正確性配慮〕			
X20 文法的に正しく話す	.659	-.050	.062
X21 正しく発音する	.640	.042	.133
X22 相手が自分の話を正確に理解しているかに注意する	.632	.222	.095
言葉遣いは適当かどうかに気をつける	.602	.101	.041
わからないときは繰り返してもらい確認する	.571	.377	-.082
相手の反応から、相手の感情や意見を推測する	.549	.142	.236
自分と相手との文化慣習の違いに注意する	.522	.158	.087
相手の話を最後まで聞く	.494	.386	-.016
相手の話の内容を正確に理解しようと努める	.483	.135	-.159
相づちを打つ	.442	.313	.195
中立的な立場で意見を言う	.180	.134	.123
〔率直性配慮〕			
X23 いやならいやとはっきり言う	.010	.697	-.101
X24 感情をはっきり出す	.152	.668	-.090
X25 積極的に発言する	.212	.626	.109
冗談を言って相手を楽しませる	.077	.538	.135
話が途切れないように気を付ける	.208	.443	.409
相手と意見が違うときは納得いくまで話す	.309	.438	-.069
相手にも話す機会を与える	.390	.413	.061
自分の意見はストレートに言う	.079	.396	-.041
身近な話題について話す	.327	.354	.244
〔同調配慮〕			
X26 わからなくてもわかったふりをする	-.034	-.149	.714
X27 相手の反応に合わせて自分の意見を変える	.030	.052	.684
X28 議論は避ける	.043	-.087	.510
相手が自分をどう思っているかに注意する	.309	.248	.381
相手の気持ちを考え失礼にならないようにする	.363	.348	.381

Table 13　構成概念間の相関行列（日本人学生；n＝137）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 留学生友人	1										
2 留学生親近感	.74	1									
3 日本文化評価認知	.28	.27	1								
4 留学生の文化への興味	.37	.31	.24	1							
5 サポート義務	.24	.34	.22	.32	1						
6 受容義務	.11	.23	.22	-.05	.18	1					
7 同化要求	.02	.05	-.08	.13	.13	-.24	.1				
8 積極的関与要求	.13	.21	-.04	.28	.29	-.03	.36	1			
9 正確性配慮	.17	.22	.13	.20	.20	.06	.08	.11	1		
10 率直性配慮	.11	.16	.02	.20	.22	-.00	.10	.27	.20	1	
11 同調配慮	-.15	-.24	-.11	-.13	-.06	.04	-.02	-.13	.11	-.08	1

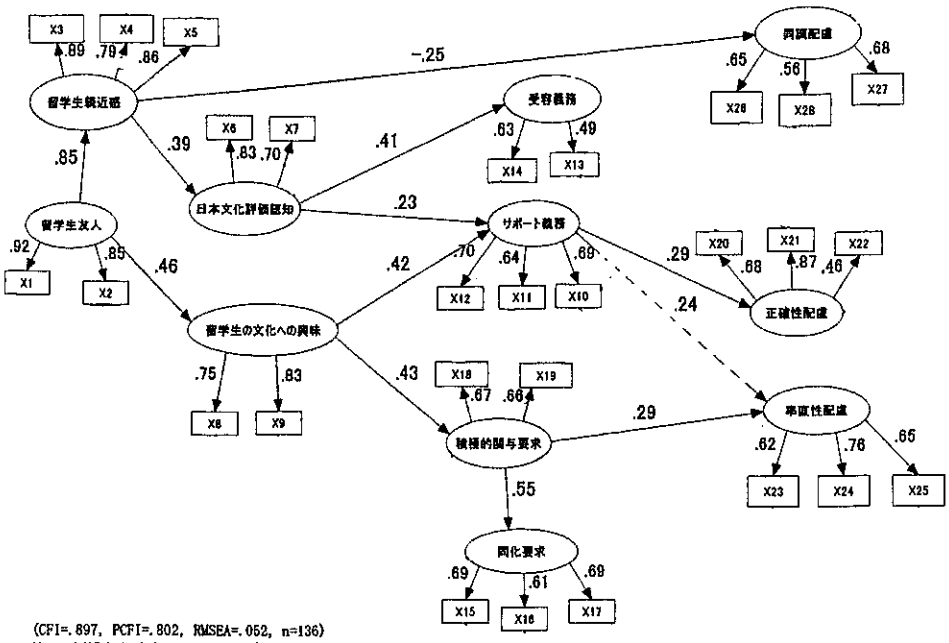


Fig. 4　意識的配慮活性化のパスダイアグラム：日本人学生の場合

入れてあげるべきだといった信念が，異文化間コミュニケーションを深めるためには重要であることを示唆するものである。また「積極的関与要求」も「率直性配慮（.29)」に影響を与えている。留学生は留学生たちだけで固まろうとするのではなく，日本人学生に積極的に関わるべきだという信念は，留学生への一方向的要求に留まらず，日本人学生自身の能動的な関わり方を促進することが推察される。

また，「留学生の文化への興味」は意識的配慮を促進する上記の２つの信念即ち「サポート義務（.42)」と「積極的関与要求（.43)」を強めている。そして「留学生の文化への興味」を高めるのが「留学生友人（.46)」である。留学生の友人を持つことが留学生の国の文化に目を向けさせ，さらに日本人学生及び留学生それぞれの行うべき行動に関する信念を間接的に高めることが示されている。

また，「留学生友人」は「留学生親近感（.85)」を強め，「留学生親近感」が「日本文化評価認知（.39)」を高め，「日本文化評価認知」は「受容義務（.41)」「サポート義務（.23)」を強めている。留学生友人を持つことは日本文化に対する留学生の評価が高いことを知ることにつながり，そうした認知が日本人学生を寛容にさせ，留学生に日本式の慣習を強要せずに留学生をそのまま受け容れよう，留学生のサポートを積極的に行おうという心を育むことがわかる。

同時に「留学生親近感」は「同調配慮（－.25)」に負の影響を与えている。留学生との交流に慣れることで，それまでは相手の気持ちを憶測しつつ無難に関わろうとしていた意識から，より積極的に異文化間コミュニケーションに臨もうとする意識に変化することがうかがえる。

これらのことから，日本人学生にとって留学生の友人を持つことが，いかに異文化接触に対する心理面での受け容れ態勢を促進するかが推測されよう。留学生友人を持つことで異文化への関心が高まると同時に，留学生への理解や親しみが増し，ひいては留学生との交流を深めるために自分が果たすべき役割に関する信念が強められ，その結果，異文化間コミュニケーションのための意識的配慮が活性化されるのである。

また，「受容義務」はいずれの意識的配慮をも活性化しないことが示された。留学生を寛容に受け容れるべきだというだけでは留学生への能動的な働きかけに結びつかないことがわかる。また，「積極的関与要求」は「同化要求（.55)」を強めるが，「同化要求」は意識的配慮に特に影響を与えていないことも示された。積極的関与への期待は，留学生に日本の慣習を押し付け，日本への同化を要求する信念につながりかねないこと，そうした同化への要求は，日本人学生自身が留学生に心を開き，異文化間コミュニケーションを深化させるための意識的配慮の活性化には結びつかないことが推察される。

まとめ

本研究では，アジア系留学生及び日本人学生を対象に，意識的配慮の促進に関する諸要因間の関連を検討してきた。その結果，アジア系留学生にとって，留学生活の充実と日本文化への肯定的評価が意識的配慮の活性化につながることが明らかになった。また日本人学生については，留学生の友人を持つことが，異文化に目を向け，異文化に向かう心を養う可能性が示唆された。

日本人学生の信念に関する予備調査で，留学生にもっと自国の料理や音楽などを紹介してほしい，授業で留学生とグループで調査を進めるようなやり方を取り入れてほしいといった意見も見られた。このように，日本人学生は留学生に対して無関心ではないが，自分から働きかけることには消極的である様子が見受けられる。交流する場が準備されていれば参加したいといった受動的な意識から，より能動的に留学生に関わろうとする意識へと転換させるためには，異文化交流の持つ意義を検証する研究が活発になされることと同時に，そうした研究成果を踏まえた取り組みが必要であろう。

今回の研究では，被調査者の70%が中国人の留学生であった。各構成概念について中国，韓国，台湾・ベトナムの４水準で分散分析を行ったところ，幾つかの概念について有意差が見られたものの，出身国別に因果モデルを検討する必要性は低いと判断し，アジア系留学生として一括し分析を行った。しかし，今後は留学生の出身国の影響の仔細な検証が必要であろう。また，意識的配慮が実際の相互作用を通してどのように変動するのかを明らかにするために，ステレオタイプを含む対人認知的要因の影響も解明されねばならず，今後の課題としたい。

引用文献

萩原滋　1991　日本留学に対する在日および帰国留学生の評価―1975年および1985年の調査結果から　異文化間教育，5，35-48.

早矢仕彩子　1997　外国人就学生の自己認知，自・他文化への態度が適応感に及ぼす影響　心理学研究，68，346-354.

一二三朋子　1995　母国語話者と非母国語話者との会話における母国語話者の意識的配慮の検討　教育心理学研究，43，277-288.

一二三朋子　1999　非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連―日本語ボランティア教師の場合―　教育心理学研究，47，490-500.

一二三朋子　2000　日本人との会話における外国人留学生の意識的配慮の検討　東京成徳大学研究紀要，7，21-28.

一二三朋子　2003　意識的配慮の共生的学習に関する因果モデルの検討―アジア系留学生の場合―　教育心理学研究，51，175-186.

一二三朋子　2004　意識的配慮の共生的学習に関する因果モデルの検討―ボランティア日本語教室アジア系学習者の場合―　教育心理学研究，52，93-106.

石隈利紀　1989　論理療法の哲学・理論・技法　論理療法にまなぶ　日本学生相談学会編　川島書店　31-59.

岩男寿美子・萩原滋　1988　日本で学ぶ留学生―社会心理学的分析―　剄草書房

吉沅洪　1999　中学人留学生のビリーフ・システムと学習態度・意欲が異文化適応に与える影響　学生相談研究，20，143-152.

勝谷紀子・山本直美・坂元章　2001　アジア系留学生と日本人学生の相互知覚ギャップ：女子の大学生に対する実験　社会心理学研究，17，43-54.

倉地暁美　1991　異文化間コミュニケーション能力開発のために―ジャーナル・アプローチの創出とその意味　異文化間教育，5，66-80.

馬越徹　1991　異文化接触と留学生教育　異文化間教育，5，21-35.

岡崎敏雄・一二三朋子　1995　多言語・多文化共生のパースペクティブに立つ日本語教育における言語的共生化　教育学研究紀要，41，450-455.

山崎瑞紀　1993　アジア系留学生の対日態度の形成要因に関する研究　心理学研究，64，215-223.

山崎瑞紀　1994　アジア系就学生の対日イメージ形成に関する因果モデルの検討　教育心理学研究，42，442-447.

山崎瑞紀・倉元直樹・中村俊哉・横山剛　2000　アジア出身日本語学校生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割　教育心理学研究，48，305-314.

山崎瑞紀・平直樹・中村俊哉・横山剛　1997　アジア系留学生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割　教育心理学研究，45，119-128.

横田雅弘　1991　留学生と日本人学生の親密化に関する研究　異文化間教育，5，81-97.